

ルイ＝フェルディナン・セリーヌの 没後刊行小説『戦争』（2022）に見る 野原のイメージ

有田 英也

キーワード：セリーヌ、没後刊行、戦争、脱出、性

はじめに

ルイ＝フェルディナン・セリーヌの遺稿のうち『戦争』（原題 *Guerre*）は、作者の没後60年を経て発見されるやただちに校訂を経て出版され、16万部とも言われる商業的成功を収めた。このテキストの出版は、セリーヌ小説の没後刊行にどのような意義があるのだろうか。本論は、まずセリーヌのさまざまな遺稿の刊行プロセスを見渡す⁽¹⁾。

ただし、本論は校訂者パスカル・フーシェによる注記に屋上屋を架すものではない。日本の読者への文献学的配慮も、訳者森澤友一朗⁽²⁾と杉浦順子⁽³⁾ら専門研究者に委ねたい。1990年代からセリーヌの初期小説（『夜の果てへの旅』と『なしくずしの死』）についていくらか論考を発表してきた読者のひとりとして、このたびの遺稿に焦点化しつつ、没後刊行の意義を論じてみよう⁽⁴⁾。

次に、校訂者によって「*Guerre*」と名付けられた、部分的だがひとつながりのまとまった物語をなすこの小説で、いくつかの野原の場面に即して、戦争のイメージを検討する。

「野原」（campagne, champs）は、まず語り手である負傷兵が意識を取り戻した戦場（champs de bataille）である。戦況の悪化で別の野戦病院に貨車で移動するさいに、夢うつつで迷い込んだ土地も「野原」、「草地」（prairie）と呼ばれる。そこは野戦病院から外出を許されてぶらつく町はずれのこともある。最後

に、この兵士が戦場を逃れてロンドンに向かう算段をする密会の場所も、運河の閘門のある同じ町はずれの野原である。

小説冒頭で負傷兵がさ迷った土地には現実の地名イブル（Ypres）を英軍兵士がなまって発音したイブレス（Yprès）の表記が与えられ、フランドル丘陵地での戦いだと知られる。だが、手書き原稿では、ここだけの短い記述ではあるが、後続する物語の舞台となる町「Peurdu-sur-la-Lys」ではなく、『夜の果てへの旅』で主人公が目指す「Noirceur-sur-la-Lys」とされている。校訂者は、この記述を「{ }」に入れて区別しつつ、その意味内容は物語の全体と両立するとしている⁽⁵⁾。つまり、この「野原」は現実のリス川流域の町の外れにあって、『夜の果てへの旅』とわずかにつながっているのである。

以上の理由から、本論は、遺稿に見える「野原」のイメージを、セリーヌの初期代表作『夜の果てへの旅』を念頭に置いて論じるものである。

なお、本論は、成城大学フランス語フランス文化研究会第24回大会（2024年6月29日）での口頭発表に、ほぼ原形を止めないほど加筆した。貴重な意見を賜った会員の皆様に感謝申し上げます。

1 没後刊行の意義

ルイ＝フェルディナン・セリーヌは1961年7月1日、小説『リゴドン』脱稿後、脳卒中で急死した。以後の出版が没後刊行ということになる。

没後刊行物には、まず作者が生前に校了（bon à tirer）に至らなかった未完の作品があり、その形態は校了紙以前のゲラ、タイプ原稿（tapuscrit）、手稿（manuscrit）などさまざまである。『戦争』（*Guerre*）は手書きの「初稿」とされる。次に、校訂作業において異本とされたテキストが、参考として校訂版に付されることも、それ自体が出版されることもある。さらには書簡や日記や覚書などさまざまなテキストが没後刊行物に含まれる。専門研究誌『カイエ・セリーヌ』は、セリーヌがアフリカ植民地から両親に宛てた手紙や、作家となって出版人に宛てた手紙を、1970年代から精力的に公刊してきた。

はじめにプレイヤッド版小説集について述べておこう。

セリーヌ小説には、3種類のプレイヤッド版があり、うち2種類が校訂版である。セリーヌの死の翌年1962年と1969年に小説集全2巻がプレイヤッド叢書

ルイ＝フェルディナン・セリヌの没後刊行小説『戦争』（2022）に見る野原のイメージから、ほとんど註と解説を欠いた形で出ている（現在、版元品切れ）。

次いで、本論でプレイヤッド旧版小説集とする校訂版全4巻が、1981年から1993年にかけて出版された。第5巻は2009年刊行の書簡集である。

そして、ガリマールは2021年に発見された草稿と、これまでに蓄積された資料をもとに、編年体のプレイヤッド新版小説集全4巻を2023年に出版した。発見の重要性が認められ、セリヌ小説の没後刊行にある程度の区切りがついたとの判断がなされたものと思われる。

それでは小説群の没後刊行について述べよう。

まず、晩年のセリヌを取り巻く出版状況を見なくてはならない。対独協力作家の汚名を着たセリヌは、ドイツを経てデンマークに逃亡した後、現地で収監された。釈放後もフランス本国への移送と裁判を免れ、ついに1951年4月、パリ軍事法廷により第一次世界大戦中の軍功をもって恩赦を得て、同年7月に帰国した。ここから旧著の再版と新著の発表が始まる。これは対独協力と反ユダヤ主義の烙印を押された作家の、小説家としての再評価を意味した。それゆえエチャンブルは恩赦の直後から、復権許すまじと声を上げた⁽⁶⁾。

セリヌ小説に通暁している読者は、『おとぎ話はまた今度』という、フランス語の構文を大胆に切断・変形した、読みづらい小説を知っているだろう。著者の死去の時点で、すでに『おとぎ話はまた今度 I, II』は、それぞれ1952年と1954年にブランシュ版で刊行されていた。第2巻の副題は「ノルマンズ」である。だが、帰国後に出版されたこの実験的文体の作品は不評であった。

セリヌが1957年に、対独協力者であった自身の観点から爆撃下のドイツを描く『城から城』を出版して、評価に転機が訪れる。セリヌは、けっして悔い改めない反抗者としての作家像を、続く『北』『リゴドン』と合わせて研究者が「ドイツ3部作」と呼ぶ小説連作によって定着させ、その文名を悪名としたのである。前述のように『リゴドン』の原稿は完成されていたので、没後刊行の遺作ではあっても未完の作品ではない。最初のプレイヤッド版セリヌ小説集は、初期小説（『夜の果てへの旅』と『なしくずしの死』）を第1巻に、戦後のドイツ3部作を第2巻に収める。

その後、著者の死後20年以上が過ぎた1985年に、『おとぎ話はまた今度』初稿が出版された。そこでプレイヤッド旧版小説集第4巻（1993年）は、これを小

説未定稿および「Y教授との対話」とともに収録した。小説言語の革新者としてのセリーヌ像が、そこで目論まれていたとも言える。

とはいえ、没後刊行に期待する読者の中には、フランスに帰国したセリーヌの新作を読みたいというより、むしろ1932年に『夜の果てへの旅』で華々しくデビューした新進作家が版元ロベール・ドゥノエルに予告していた小説が、遺稿として実在するかどうかを知りたい者がいたはずである。本論の主題に関わるのでやや詳しく述べよう。

「ぼくは『なしくずしの死』第1の書の出版を決めた。あくる年に、少年時代、戦争、ロンドンだ。」(1934年7月16日付書簡)

ほぼ同内容の手紙を、渡米中のセリーヌは友人の作家ウジェーヌ・ダビにも同年7月14日付けでシカゴから書き送っている⁽⁷⁾。この言葉が嘘でも誇張でもなかったことは、「少年時代」が『なしくずしの死』として1936年に、「ロンドン」にあたる『ギニョールズ・バンド』が著者の生前の1944年と1952年に出版されたことから分かる。

セリーヌの死後、1964年に『ロンドン橋 ギニョールズ・バンドII』が、2巻を合本にして出版された。

また、「戦争」については、セリーヌのデンマーク収監中の1948年と帰国後の1952年に『戦争』(*Casse-pipe*)が発表され、さらに1970年には「胸甲騎兵デトゥーシュの手記」とともに没後刊行された。

セリーヌがドゥノエルに語った「少年時代、戦争、ロンドン」の「戦争」と「ロンドン」に呼応するこれらの著作は、1988年にプレイヤッド旧版小説集第3巻に、異本とともに収められた。

だが、このうち「戦争」について言えば、『戦争』(*Casse-pipe*)と「胸甲騎兵デトゥーシュの手記」はフォリオ版にして110ページほどの断片的テキストに過ぎない。プレイヤッド旧版小説集と手紙が出版された後も、まとまった物語は見つかっていなかった。それゆえ、2021年に発見され、校訂を経て2022年から2023年にかけて出版されたタイプ原稿および手書き原稿は、その内容がセリーヌの手紙と他の著作での言及に合致しており、何より著者の推敲を経て一貫した物語をなしていたため、ミッシングピースを埋めると期待された。

これらの没後刊行著作とは『戦争』（*Guerre*）、『ロンドン』、『クロゴルド王の意志およびルネ王伝説』である。まずブランシュ版で出版され、執筆時期に合わせてプレイヤッド新版小説集に収められた。

本論で扱う小説（*Guerre*）は、プレイヤッドと廉価版フォリオに異同がある。まず、前者ではテキストのタイトルが著者に依らないため〔*Guerre*〕とカッコ入りになっているのに対し、後者フォリオではそのまま小説表題とされている。次に、いずれも手書き原稿のまとまりをシークエンス（séquence）と呼んで章立てとしている。だが、プレイヤッドではより学術的に、原稿上で最初のシークエンスに付された「10」という数字、また「2」と内容的に後続するシークエンスに付された「2'」という指示を重んじて、原稿の配列は共通していながら、プレイヤッド版では「10, 1, 2, 2', 3, 4」と章立てし、フォリオ版ではシークエンス間に余白を入れつつも、章立てにいかなる記号も用いず、ひと息に読ませようとしている。文字の読み取りについては、校訂者フーシェがそれぞれのエディションに注記している⁽⁸⁾。また、フォリオ版では同じフーシェが「ルイ＝フェルディナン・セリヌの人生と作品における *Guerre* について」⁽⁹⁾で解題している。

森澤友一郎は出版された遺作の一部（*Guerre*）を、『戦争』という邦題で早くも2023年に日本語に翻訳した。この表題は、前掲の、邦訳もある『戦争』（*Casse-pipe*）と紛らわしいので、本論では原題とともに言及する。なお、訳者森澤は『戦争』（*Casse-pipe*）に「死地」という訳語を提案する⁽¹⁰⁾。

次は、書簡など文学作品の周辺テキストの刊行状況である。

これまで専門誌『カイエ・セリヌ』に発表されてきたセリヌの手紙の他、セリヌが出版人や友人に宛てた膨大な手紙は、1990年から2013年にかけて大部の書簡集にまとめられ、その多くが2009年にプレイヤッド版第5巻書簡集にまとめられた。個人的な思い出になるが、1998年に富山太佳夫・有田英也編『セリヌを読む』を国書刊行会から出版するまで、本論筆者の『夜の果てへの旅』研究は、プレイヤッド旧版小説集と、『カイエ・セリヌ』所収の書簡類および医事評論に依拠していた⁽¹¹⁾。プレイヤッド版第5巻の刊行によって書簡の参照はその不完全さを露呈し、ルイ＝フェルディナン・デトゥーシュ（作家セリヌの本名）の防疫医師の側面への着眼も、2000年代以降のセリヌ伝と、

特にルッサンの浩瀚な研究書によって陳腐化してしまった⁽¹²⁾。

没後刊行は忘れられた著作の再版も意味する。このたびの遺稿の発見に際して、セリーヌの反ユダヤ主義発言および対独協力に関心を持つ人々は、はたして彼の政治的な非難攻撃文書いわゆるパンフレまでも再版されるのかと自問するかもしれない。『皆殺しのためのバガテル』（生田耕作による邦題は「虫けらどもをひねりつぶせ」）、『死体派』、『苦境』が日本語で読めるこの国の人々には想像しにくい、これらの反ユダヤ文書は復刊そのものが著作権者であった故リュセット・アルマンゾールによって禁じられており、翻訳とはいえその内容を知りうるのは、一般には日本語話者に限られている。もちろん、セリーヌの反ユダヤ主義パンフレまで射程に収めた研究は、アンリ・ゴダールの1985年の画期的な物語論⁽¹³⁾によって弾みがつき、単行本だけ取ってもアルメラス、バジェス、ベナール、前述のルッサン、ソレルスと枚挙に暇がない。だが、セリーヌの反ユダヤ主義的書簡を資料としたアルメラスの研究が出版差し止め請求されるという事態は、日本では実感しづらい⁽¹⁴⁾。

2 テキストについて

手稿が記された紙の一部には、クリシーの施療院の診断書と、エリザベス・クレイグに宛てた手紙の下書きが使われている。施療院勤務は1929年1月に始まり、クレイグ宛の手紙はロサンゼルスから1934年初頭と考えられる。これらのことから、セリーヌはこの『戦争』（*Guerre*）と『ロンドン』を書いたことによって、版元ドゥノエルに同年7月中旬に次作の構想を伝える手ごたえを得たと推測できる。

前述のように手稿の最初のページには、<10>と番号が打たれ、「Pas tout à fait. J'ai bien dû rester là encore une partie de la nuit suivante.」と書きだされている。これはセリーヌのテキスト（texte）である。さて、これはそのままセリーヌのウーヴル（œuvre）と呼べるのだろうか。版元ガリマールはこの手稿を未完の「作品」と捉え、「未刊行のセリーヌ」と赤帯に記して書店に並べた。*Guerre* はセリーヌ全作品という意味のウーヴルに対して、その一部をなす独立した作品という認識である。

次に、このテキストを読むには何をコーパス（corpus）として参照すればい

いのだろうか。コーパスとは言語学の学術用語で、考察の対象とする資料体を指す。テキスト、コーパス、ウーヴルには「テキスト＞コーパス＞ウーヴル」の大小関係、さらには「テキスト＜コーパス＜ウーヴル」の包含関係が予想される。セリーヌによって書かれた文字列のうち意味のあるテキストを選び、問題意識に即してさまざまなコーパスを探索した末に、文学作品として扱うに値するウーヴルが絞られる。そこに価値判断の関与は無視できない。

フォリオ版には7ページほどの「民衆語、隠語、医学用語、軍隊用語辞典」と、3ページ弱の登場人物事典が付いている。辞典には、「Zouave」「植民地軍歩兵隊のアルジェリア兵」や「Ambulance」「軍隊用語では負傷者のための救護所あるいは野戦病院」のように大きめの辞書なら載せている語彙も、「Bifeton」「紙幣」のようにセリーヌの造語も採られている。人名辞典の方は、カスカードのように、同書でベベル・ゴントランともゴントラン・カスカードともジュリアン・ボワッソンとも呼ばれ、『ギニョールズ・バンド』の登場人物と同じ運命をたどる、と貴重な説明がある。事典は『戦争』というテキストを読解するさいに、セリーヌ全小説をコーパスとするよう促しているとも言える。

それではフランスでは出版が依然として憚られている反ユダヤ主義パンフレも、『戦争』（*Guerre*）や『ロンドン』を読み解くためのコーパスに入るのだろうか。このように問うのは、セリーヌ作品の価値を世に問うことが、いまだにスキャンダルと感じられるフランス批評界の傾向のためである。

反ユダヤ主義パンフレ（非難攻撃文書）は、著作物にして『皆殺しのためのバガテル』『死体の学校』『苦境』の3点である。それは文学作品としてのウーヴルには入らなくても、セリーヌの書いたテキストであるのは自明である。ならば、それはセリーヌ文学の十全な理解に必須のコーパスをなすのだろうか。もしそうなら、上級教員資格試験の課題作に『夜の果てへの旅』が選ばれた暁には、反ユダヤ主義パンフレまでもコーパスとされ、大学の受験準備クラスで参考文献として学ばれるかもしれない。さらに、フランスに教科書検定制度はないが、リセ（国立高等学校）の国語教育を歪めかねないからと、セリーヌ作品の使用が忌避されるかもしれない。そのためには断固として反ユダヤ主義パンフレと文学作品つまりウーヴルを絶縁すべきという意見も成り立ちうる。

一方、禁忌の対象たるテキストのおかげでウーヴルが過大に評価されるとす

れば、この過大評価に抗うために、テキストではなく研究者のモラルが攻撃対象となりかねない。反ユダヤ主義、人種主義、排外思想に関連するシリーズの禁忌の書物をコーパスに取り入れて主題化した研究者は、業績の公刊はおろか、フランス国内のシンポジウムで口頭発表することも難しいかもしれない。こうした抑圧もシリーズ没後刊行著作の醸すスキャンダルと言える。

この点で、シリーズが最初のパンフレ『皆殺しのためのバガテル』（1937）を出版した翌年に、エマニュエル・ムニエが自身の主宰する『エスプリ』誌に掲載した書評は興味深い。ムニエは、シリーズが既存の反ユダヤ文書をあからさまに剽窃したと指摘し、長い引用を並べて見せた⁽¹⁵⁾。レオン・ブルムを首班とする人民戦線内閣が成立した1936年以降の、極右の言説と行動がピークを迎えたこの時代は、嘆かわしいことにシリーズの反ユダヤ主義言説に燃料を備給したのである。なお、『エスプリ』は同時期、「ヒトラー主義」について先駆的な特集号を編んでおり、エマニュエル・レヴィナスも寄稿している。

ムニエのシリーズ論は、1930年代の反ユダヤ主義がナチ占領下およびヴィシー対独協力政権のもとでどのような暴挙と偽善にフランスを導くかを見通せなかった。だが、アウシュヴィッツ後の批評家は、パンフレ作家シリーズを、まるで参考書を無断借用して書いた課題作文で凡庸な高校教師をうならせる悪戯者のように茶化すことはできない。シリーズの反ユダヤ主義パンフレは、そのテキストをウーヴルから除去して封印するか、あるいはそれが可能ならウーヴルの読者に警告し、明晰さを要請することで、徹底的な除染を行う必要がある。封印も除染もただ事ではない。

フィリップ・アルメラスの『シリーズの思想』（1992）は、三つの攻撃文書をもコーパスに加えて、シリーズのウーヴルがいかなる思想を内包するかを論じた。アンヌ・スバ＝コレットは、2010年の第18回シリーズ国際シンポジウムで、『皆殺しのためのバガテル』と、シリーズが同書で批判した人民戦線内閣首班レオン・ブルムのテキストを突き合わせて、「スタヴィスキエ事件」「週40時間労働」「人民戦線」「平和主義」「人種主義」などいずれも政治的な主題に即して手堅く比較検討している⁽¹⁶⁾。

それでは、執筆時期が1934年とされるこのたびの『戦争』は、シリーズのウーヴル（文学的著作の全体）の中で、あるいはウーヴルに対して、どのよう

ルイ＝フェルディナン・セリヌの没後刊行小説『戦争』（2022）に見る野原のイメージ

な位置付けにあり、参照して関連付けるべきコーパス（資料体）はどこまでだろうか。ここで問題となるのは、フランス1930年代を特徴づけた、諸悪の根源を移民、植民地人など外国人に求める政治的排外主義との関係である。

同作では、野戦病院の同室のマグレブ住民に対して、「bicot」「sidi」など第一次世界大戦当時の差別語が使われている。書評の中には、他のすべての名を持つ兵士たちと対照的に「アラブ野郎の上等兵」（brigadier bicot）とのみ名指すのは差別だとの批判もある⁽¹⁷⁾。それなら隣のベッドのアルジェリア兵（zouave）にオスカルという名があるのは、植民地における白人とアラブ系住民の隔離政策の反映と読むべきなのだろうか。むしろ、「bicot」の連発はリアリズムの範囲内に収まるのではないか。反ユダヤ主義については目立った表現が見当たらなかった。『戦争』（Guerre）のコーパスからは、さしあたり1937年以降の反ユダヤ主義パンフレを外し、デトゥーシュの大戦中の手紙のみ参照しよう。

3 『夜の果てへの旅』の異本か？『ギニョールズ・バンド』の導入部か？

この手稿は6つの断章からなる。校訂者パスカル・フーシェにならって、これらを六つのシークエンス（séquence）と呼ぼう。フランドルでの戦闘を物語る最初のシークエンスには10と番号が打たれている。したがって、騎兵大隊に配属されたルイ・デトゥーシュの戦前の兵営時代と、開戦から最前線への移動までを物語る部分が、ほぼ確実に欠落している。というのは、フェルディナンが革の肩掛けカバンに入った連隊の資金が盗難にあったことを気にかけているからである⁽¹⁸⁾。校訂者フーシェは同作の解説「ルイ＝フェルディナン・セリヌの人と作品のなかの『戦争』」で、連隊の資金をくすねられて絶望した副官が、無謀な前線突破を企てた顛末が、既刊であるもうひとつの『戦争』（つまり「死地」）に、ロベール・プーレがセリヌから聞いた話として収まっていることから、このたびの『戦争』には1914年8月の開戦から三か月の物語が欠けている、と推測する⁽¹⁹⁾。

最後の断章は、語り手にして主人公のフェルディナンが、ロンドンに向かう船中で終わっている。これは『ギニョールズ・バンド』と重なる次作『ロンドン』を予告する。第5シークエンス末尾で銃殺されるカスカードは、『ギニョールズ・バンド』にも同じ名前で登場する。『戦争』が『ギニョールズ・バンド』

の導入部かどうかという問題は、没後刊行されたばかりの『ロンドン』と『ギニョールズ・バンド』の関係いかに委ねられる。

『戦争』（*Guerre*）は、語り手フェルディナンの戦争中の行動が、『夜の果てへの旅』のフェルディナン・バルダミュと大きく異なることから、後者の異本というより、むしろ別作品と取るべきだろう。『夜の果てへの旅』の語り手は、作者デトゥーシュと同様、騎兵大隊の歩兵として転戦し、負傷で入院する。だが、それ以後は体験から逸脱して、パリで精神病院に収容された後、銃後で使い走りをし、戦後まもなく植民地の森林開発会社の契約社員としてアフリカの架空の国に赴いたものの、同僚に裏切られて逃亡し、貨客船でアメリカに渡るのである。

たしかに『夜の果てへの旅』のバルダミュが戦傷を得て入院中に勲章をもらったことは『戦争』（*Guerre*）のフェルディナンと共通する。だが、受傷と受勲は、後者ではふたつのシークエンスを丸ごと使って語られるのに対して、『夜の果てへの旅』では、アメリカ人看護婦ローラを魅了する外見の飾りとして略述されるにすぎない。『戦争』（*Guerre*）は『夜の果てへの旅』でなおざりにされた細部を、体験に寄せつつ大きく引き伸ばした別作品と言えるだろう。

文体的にも、『戦争』（*Guerre*）は『夜の果てへの旅』から『なしくずしの死』に至る顕著な変化、つまり中断符（…）による文の寸断と変形を経ていない。『夜の果てへの旅』とは一部で時系列を共有するが設定の異なる物語を、『夜の果てへの旅』の文体を用いて書いたもののように読める。

アンリ・ゴダールは、『戦争』（*Guerre*）を「恢復の小説（roman de la convalescence）」と見立てる⁽²⁰⁾。これを敷衍すれば、『夜の果てへの旅』と『戦争』（*Guerre*）は、医療行為あるいはそのパロディにおいても分岐する。フェルディナン・バルダミュに対する隔離と電気ショック療法は、戦争神経症を病む兵士に対して暗黒小説風である。野戦病院のフェルディナンは看護婦に性器を刺激され、また彼女を愛撫して外出許可をせしめる。傷ついた兵士が性を通じて活力を回復するのは、汎性的ファンタスティック小説とでも名づけられよう。

『戦争』（*Guerre*）にあって「Noirceur-sur-la-Lys」という地名は、筋の一貫性に対する傷というより、むしろ『夜の果てへの旅』との結節点になって、フェルディナン・バルダミュを主人公とする戦争小説とフェルディナンを主人公と

する恢復期小説を接合させる。また、何度も連隊の公金紛失に言及するフェルディナンの懸念は、手稿の欠落部分に詳細が書かれていたかもしれず、ならば不安の気分が、兵営時代を物語る『戦争』（*Casse-pipe*）との共鳴版になるだろう。こうして、『戦争』（*Guerre*）は冒頭の戦場に第2シークエンス以降の病院が滑らかにつながった中編小説として読める。

思想的には、傷病兵の醒めた反軍主義が3作すべてに共通する。第3シークエンス末尾で軍功を表彰されたフェルディナンは、続く第4シークエンスで、パリから駆け付けた両親や、野戦病院の若い看護婦、前線逃れのカスカードとその妻アンジェルらと、父親の勤める保険会社の上役の屋敷で会食する。戦闘の非当事者たちのうわべのナショナリズムに辟易しながらも、持ち前のアナーキズムを口に出せずに沈黙思考するくだりに、密告者を恐れて病院では本音を明かさない『夜の果てへの旅』のバルダミュを感じさせるものがある。

そして何より、『夜の果てへの旅』では1918年の休戦の後に物語がフランスの外で展開するのに対して、『戦争』（*Guerre*）では大戦中のロンドンに舞台が移る。両者の物語は異なる時と空間においてフランスから離脱する。ロンドンに向かう船で、フェルディナンが発した、「海万歳（*Vive la mer*）」と「戦争万歳（*Vive la guerre*）」という二つの歓声は、どのような感情の放出だろうか。傷病休暇を脅し取ってまんまと前線を離れることで、はたしてフェルディナンの戦争恐怖は解消されたのか、それともロンドンも戦場であったのか。その答えは、別稿で論じることとする⁽²¹⁾。

4 「野原」の意味するもの

『戦争』（*Guerre*）には、本発表で注目する「野原」といい、運河といい、『夜の果てへの旅』で必ずしも戦争と結びつかない風景と心情が、叙景に見いだされる。後述するように、作者の無意識的記憶との関連が暗示される。

雑居状態で身動きできない狭い空間と、道連れを伴って彼方に向かう開けた道が、『戦争』（*Guerre*）では交互に現れ、それが語り手フェルディナンの発話と行動を誘発する。それぞれ閉鎖と解放に彩られた空間の交代は、そのままテクストの収まる六つのシークエンスの回り舞台をなす。本論では第5シークエンスの町はずれへの遠出と、第6シークエンスの同じ場所での密談に注目する

が、まずセリヌの戦争が具象化される隔離と脱出の綾に触れておこう。

第1 シークエンスで負傷後に目覚めた語り手は、一人のイギリス兵と町を目指して歩くうちに、「周囲のいたるところで野原 (champs) が流動し、まるで巨大なネズミどもが畝の下を動きながら土くれを持ち上げているかのように膨らむと、大きなこぶになって蠢く」(35-671-20~21) 幻想的な光景を見る⁽²²⁾。砲撃下で表土をはぎ取られる野は、ネズミの巣に例えられる。

貨車で移動中のある晩、語り手が迷い込んだ「野原」と「草地」では、顔に開いた穴から望遠鏡のように遠くが見えたり、外れそうな下顎を押さえて話したりする戦友たちと再会する。そこは死者の住む幻想の野、言うなれば戦死者の霊の集うヴァルハラであり、語り手はクロゴルド王の物語を聞かせる。実際には、棺とともに貨車で別の野戦病院のある町に運ばれていたのだった。

第2 シークエンスでは、貨車から落ちて草原でふた晩過ごした後に救出された語り手が、病院の大部屋という閉鎖空間にいる。しかも、彼は全滅した部隊のほぼ唯一の生存者だったため、軍事法廷のレキュミュル少佐から病室で事情聴取されていた (71-692-58)。その後、看護婦に頼んで外出を許され、ベベールという金回りのいい若者と、町のカフェで「軍人や私服刑事」(85~86-700-73) に交じって酒を飲む。だが、それは脱出とは程遠い、つかの間の解放にすぎず、二人は用心のためそれぞれ別の出入り口から病室に戻る。

次の第3 シークエンスでも、語り手は銃殺刑の影に怯えている。ベベールと小川沿いの道を散歩した後、カフェに向かうと、「広場には連隊の兵隊が、上から下へ、右から左へと溶岩みたいに流れ出ている」(98-706~707-88)。砲撃下の野原が流動したように、広場には兵隊が流出する。語り手は溶岩流のごとき戦争からは逃れられないが、勲章によって銃殺の不安から解放される。

勇者の記章を得たフェルディナンは、第4 シークエンス冒頭で、「風が吹いている、お前のガレー船を支度しろ、馬鹿どもはクソの中に置いてけぼりだ」(114-715-107) と自分にハッパをかけて戦場からの脱出の機をうかがう。とはいえ、受勲祝賀会のために病院から外出しても、固定席で無駄話に付き合わされるのは病室の閉鎖空間と変わらない。ただし、カスカード (ベベールは以降、こう名指される) が妻のアンジェルと痴話げんかになり、会食者にせがまれて歌う場面は、最終シークエンスで印象的に再現される⁽²³⁾。

第5シークエンスで語り手は、カスカードと町の外に広がる「野原」を抜けて運河まで足を運ぶ（139～141-730～731-137～139）。彼方にサトウダイコン畑（champs de betteraves）を望むその空間は、運河と曳舟道と閘門によって裁断された耕地であって、釣り竿を賃借できるビストロはあるものの、郊外の実地といった風情ではない。外出先が町の中心部のカフェでなく、カスカードの言う「野原」だったことに、何よりフェルディナン自身が驚き、「前線とは反対側の町はずれ。要するに平和だ。向こうの野砲はほとんど聞こえなかった」からだとな得する。

堤防に腰を下ろした二人の傷病兵は、「見渡すかぎり太陽と木々、やがて夏の真っ盛りになるだろう」と、将来への展望を感じる。視界には、「風をはらんだポプラ並木の陰を運河が行進していた。そいつは彼方の丘陵までぴちゃぴちゃと囁きながらジグザグに逃げ、その先は空まで長く伸びて青く染まり、三本立った煙突の一番高い奴の手前で地平線の点になった」（730～137）。畑のそこかしこで農夫がサトウダイコンを掘っている。語り手が野原に認めるのは、運河の水のように穏やかに脱出する自身の仮の姿である。

だが、ものの300メートルも歩くと二人は歩哨から誰何され、「野原を一回り（un tour）しに行く」と答えさせられる。この解放空間は「回って」戻らねばならない。すると歩哨は、視界を遮る丘陵の向こう、まさに「小運河が合流するところ」にドイツ軍が迫っていると言う。平和が幻想なら、逃げ去る水も幻想で、野原も閉域に他ならない。それでも二人は運河沿いに散歩を続ける。

物語の時間を少し戻すと、カスカードは祝賀会のお歴々たちの面前で、アンジェルから兵役逃れと重婚を暴露され、証拠の手紙を上官に届けたとまで言われていた。彼には原隊復帰して困難きわまる身の証しをするより他に、事態打開の術はなかった。散歩中にカスカードに頼まれて酒を買いに行ったフェルディナンは、背後で水音を聞いた。友は溺れようのない浅い運河に飛び込んだのである。

しかし、二人は思いを打ち明けない⁽²⁴⁾。「土手の草むら」に陣取ったカスカードは借りた釣り竿でカワカマスと小魚を釣り上げる。炊事番兼渉外係の修道女から「奇跡の漁（pêche miraculeuse）」（145-733-143）と釣果を称えられた二人は、「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」⁽²⁵⁾とイエスに言われた漁師

の趣である。だが、人間をとる漁師に、信者ならぬ兵士を徴募する以外のどんな役目があるのだろうか。獲物は修道院に寄進されて最後の晩餐に供された。カスカードは「女の声をした」(147-734-146) 憲兵に捕まって、原隊の駐屯地で銃殺刑に処せられるのであるから。

最後の第6 シークエンスでは、情夫を厄介払いしたアンジェルが、売春業の太客であるイギリス軍将校たちから情報を仕入れてフェルディナンに近づき、そこから物語の時空が解放に向けて動き出す。病院は閉鎖空間だが、それでも看護婦のはからいで離れの病棟に移された語り手は、ついに「人々が殺し合っていない異国の地に渡る手ずる」を求めるようになる(150~151-736~737-151~152)。戦局は悪化し、大広場近傍に住む公証人が、家の守りに75ミリ野砲の大八車を馬数頭つけて二階に上げてしまうほど切迫する⁽²⁶⁾。

かくしてフェルディナンは、アンジェルの手引きで、かつてカスカードと遠出した野原の先にある運河沿いのビストロで英軍工兵隊少佐に引き合わされ、三人で海路、イギリスに向かうことになる。連れ立って曳舟道を歩くフェルディナンは、「身投げしようとした」カスカードその人と彼の歌声を「閨門がよく見える草ぼうぼうの堤にたたずんで」思い出す。その時、「カスカードの歌が俺の口について出る」。英軍将校は歌詞を教えてくれと頼むのだった。同じ野原で、過去と現在、そして未来のロンドンが、戦地への拘束と戦場からの脱出を表裏として傷病兵の意識に重なる(173~175-748~750-173~176)。

ここは『夜の果てへの旅』で、平底船からアコーディオンに伴奏された歌が聞こえる場面⁽²⁷⁾を連想させる。語り手のバルダミュは、腐れ縁のロバンソンとトゥールーズの運河沿いを散策し、釣りをして時間を潰そうとしていた。

野原は記憶が流出する契機 (signe mémoratif) となる⁽²⁸⁾。だが、いずれの小説でも男性二人は、あたかも感情を持つことを禁じられているかのように、気持ちを語り合わない。セリーヌの「野原」には想起を阻害する心的機制がある⁽²⁹⁾。さしあたりそれを戦争と呼ぶことにしよう。

付記

(本論文は2024年度成城大学特別研究助成「ヨーロッパの絵画と文学に見るロマン主義的群像の比較研究」の研究成果である)

使用文献表

セリーヌ作品

- Louis-Ferdinand Céline, *Guerre*, « folio », Gallimard, 2022
Id. *Romans. 1932-1934*, « Pléiade », Gallimard, 2023
Cahiers Céline, 4 Lettres et premiers écrits d'Afrique (1916-1917), 1978
Cahier de L'Herne, n^{os} 3 et 5, 1963 et 1965 (en un volume, *L'Herne*, 1972)
森澤友一朗訳『戦争』幻戯書房、2023

伝記

- Philippe Alméras, *Céline Entre haines et passion*, Pierre-Guillaume de Roux, 2011
François Gibault, *Céline 1932-1944 Délires et persécutions*, Mercure de France, 1985
Henri Godard, *Céline*, Gallimard, 2011
Frédéric Vitoux, *La vie de Céline*, Grasset, 1988（権寧訳『セリーヌ伝』水声社、1997）

研究書

- Philippe Alméras, *Les Idées de Céline*, Berg International, 1992
Alméras (éd.), L.-F. Céline, *lettres des années noires*, Berg International, 1994.
Johanne Bénard, *L'inter-dit célinien Lecture autobiographique de l'œuvre de Louis-Ferdinand Céline*, Les Editions Balzac, Montréal, 2000
Henri Godard, *Poétique de Céline*, Gallimard, 1985
Id., *Les manuscrits de Céline et leurs leçons*, Du Lérot, 1988
Yves Pagès, *Les Fictions du politique chez L.- F. Céline*, Seuil, 1994
Philippe Roussin, *Misère de la littérature, terreur de l'histoire Céline et la littérature contemporaine*, Gallimard, 2005
Philippe Sollers, *Céline*, éditions Ecriture, 2009（杉浦順子訳『セリーヌ』現代思潮新社、2011）
富山太佳夫・有田英也編『セリーヌを読む』国書刊行会、1998年

研究論文

- Anne Seba-Collett, « Louis-Ferdinand Céline: une certaine France (une certaine déchéance): L'entre-deux-guerres », in *Images de la France dans l'œuvre de Céline, Actes du dix-huitième colloque international Louis-Ferdinand Céline*, Société d'étude célinienne, 2011

註

- (1) 参照テキストは下記。*Romans. 1932-1934*, « Pléiade », Gallimard, 2023; *Guerre*, « folio », Gallimard, 2022 本論ではそれぞれプレイヤッド新版小説集第1巻、フォリオ版と表記。発見の意義をプレイヤッド新版編者のひとりアンリ・ゴダールが「前書き」(pp. ix-xxiv.)にまとめており、本論第1節「『戦争』没後刊行の意義」はこの解説とプレイヤッド旧版(1981-1993)刊行中にゴダールが著した手稿論に依拠している。Henri Godard, *Les manuscrits de Céline et leurs leçons*, Du Lérot, 1988.
- (2) 森澤友一朗『戦争』幻戯書房、2023年、「訳者解題」pp. 229-265
- (3) 杉浦順子「ルイ・フェルディナン・セリーヌの発見された草稿をめぐって」広島修大論集第65巻第1号、2024、1-18頁。
- (4) 富山太佳夫・有田英也編『セリーヌを読む』、国書刊行会、1998年
- (5) *Romans. 1932-1934*, p. 1301, 1323 『夜の果てへの旅』ではフランドル住民が語り手を「ずいぶんと勇敢だな (Vous êtes bien brave)」と、『戦争』では英軍士官が「勇敢な兵士だな (Brave soldier!)」と称える。*Romans. 1932-1934*, p. 37; *Guerre*, p. 36.
- (6) Etienneble, « Justice pour les « collabos » » in *Hygiène des lettres, II, Littérature dégalée 1942-1953*, pp. 161-178. 初出は *Evidences* 誌、1952年6-7月号。
- (7) Gibault, *Céline 1932-1944*, p. 93; *Lettres*, p. 431.
- (8) *Ibid.*, pp. 1313-1315; *Guerre*, pp. 21-23. *Guerre* は手書き初稿だと明言。
- (9) *Ibid.*, pp. 191-200.
- (10) 森澤前掲書、p. 238. 『セリーヌの作品』14、石崎晴己訳、国書刊行会、1984年所収。
- (11) *Cahiers Céline*, 3, Semmelweis et autres écrits médicaux, 1977; *Cahiers Céline*, 4, *Lettres et premiers écrits d'Afrique (1916-1917)*, 1978; 拙論「セリーヌの太陽——語りえぬものと風景描写」『成城文藝』、140、105-88頁。1992; 同「セリーヌ文学と反ユダヤ主義——クリステヴァの精神分析批評を手がかりに」『成城文藝』156、1996年、140-122頁。
- (12) 本論で参照したセリーヌ伝および反ユダヤ主義文書まで射程に収めた研究書は使用文献表に記載。
- (13) Henri Godard, *Poétique de Céline*, Gallimard, 1985. ゴダールはセリーヌの一人称物語の語り手がバルダミュ、フェルディナン、セリーヌと変わり、ジャンルも小説、パンフレ、クロニク(年代記)と移行する点に注目した。ゴダールの論考を紹介した拙稿「小説家と語り手——物語論から見たセリーヌ小説冒頭の諸問題」『成城文藝』、144、1993、1-25頁を参照。

ルイ＝フェルディナン・セリヌの没後刊行小説『戦争』（2022）に見る野原のイメージ

- (14) 使用文献表参照。セリヌ未亡人が、無断で書簡を出版した編者アルメラスを相手取って起こした出版差し止め請求を、裁判所はすでに初版が流布しているからと棄却した。*Libération*, 8 décembre 1994.
- (15) *Esprit*, n°66, mars 1938 in *L'Herne*, 1972, pp. 466-467.
- (16) Anne Seba-Collett, « Louis-Ferdinand Céline: une certaine France (une certaine déchéance): L'entre-deux-guerres » 使用文献表参照。
- (17) Pierre Benetti, Tiphaine Samoyault, in *En attendant Nadeau* 150, 5 mai 2022
- (18) « sacoche du pognon », « sacoche, fourgons », *Romans 1932-1934*, p. 668, 669.
- (19) Céline, *Guerre*, « folio », Gallimard, 2022, pp. 198-199. *Casse-pipe* の結末は、生前のセリヌが1957年にロベール・プーレに語ったとされるが、この談話と『戦争』の異同はゴダールの註を参照。*Romans 1932-1934*, pp. 1305-1307.
- (20) *Romans 1932-1934*, p. 1303.
- (21) さしあたり、*Guerre* 冒頭で Yprès と強調されたのが1915年4月22日に毒ガス戦の始まる地名で、兵器名イペリットガスの由来となったこと、*Guignol's Band II* で防毒マスクの入手が物語化されており、新草稿『ロンドン』でも主人公の連れの英軍工兵将校がロンドン近郊で防毒マスクの製造販売に携わっていることを指摘しておく。*Romans 1932-1934*, p. 781.
- (22) 本論で多数にのぼる *Guerre* からの引用は、フォリオ版、プレイヤッド版、邦訳の順に参照ページを本文中に（35-671-20～21）と記す。訳文は既訳を参照しつつ自分で訳した。その責任は本論筆者にある。
- (23) 三度繰り返される歌詞の共通部分は、「分かっています／あなたは別嬪さんだ／あなたの優しい大きな瞳」（128-723-122）（130-724-124～125）（175-750-175～176）。
- (24) 直観的に「溺れたのか」と叫んだ語り手は、泥に足を取られてもがくカスカードから目を背け、「お前はクソまみれ、もうたくさんだ」と悪態をつく。相手も、「放つといってくれ」とつれない（143～144-731-141～142）。
- (25) 新約聖書ルカ伝第5章（1-11行）。新共同訳を拝借した。
- (26) 史実としてセリヌが入院したノール県アーズブルックに敵が迫るのは1917年末か1918年春の大攻勢だが、第3シークエンスで外出した語り手が「溶岩のように」流れる兵士たちを幻視した広場は、「11月24日の爆撃の夜、バイエルン兵が粉碎したらしい」（98-707-88）と伝聞で語られる。手稿では「1917年」という日付が抹消されていた。*Romans 1932-1934*, p. 1323.
- (27) *Romans 1932-1934*, pp. 400-401 バルダミュとパリに戻ったロバンソンは、追ってきたマドロンの銃で撃たれて絶命する。
- (28) Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau La transparence et l'obstacle*, Gallimard,

« TEL », p. 281. 「だから記憶喚起記号 (signe mémoratif) は媒介だが、思い出の無媒介的 = 直接的現前を確立すべく関与する。」

- (29) 東京都立大学オンライン紀要『Limitrophe (リミトロフ)』第6号に寄稿した論文「海と戦争——シリーズ未定稿「戦争」に見る感情とイデオロギー」も参照されたい。2025年2月末配信予定。